

## 札幌植物雑記帳(4)

### クゲヌマランと前川文夫先生

原 松 次

キンラン属のうち黄色の花をつけるキンラン以外の4種はいずれも白で道内にあり、うれしいことに札幌にも健在である。これらを市内での出会いの頻度でみるとユウシュンランはごく稀、キンランとササバギンランはまづまづでありクゲヌマランだけは各地にあるといえよう。クゲヌマランはキンランによく似ているが、花の唇弁の距は側がく片の合せ目からその先端をかすかにのぞかせるだけで、キンランのようにはっきり突きでることではない。

クゲヌマランは前川先生が1936年(昭11)に発表した *Cephalanthera Shizuoi* F. Maekawa である。和名は産地名の鶴沼(神奈川県藤沢市)で、江の島と面し当時は名高い保養地だった。種小名は本種の研究を先生に依頼した服部静夫(その地で療養生活中だった植物生化学者)を記念したという。

私が本種を初めて手にしたのは室蘭時代の昭和48年(1973)で、先生の大著「原色日本のラン。495pp. (1971)」でそれと知った。しかしその解説の中に先学者がすでに発表した北海道産の、あるランとクゲヌマランの関係がどうもすっきりせず今後の研究に待ちたい、とあった。そこで私は先生に同定をお願いすることとした。登別でとったおし葉3点と写真2枚を同封、「クゲヌマランにちかいものと思いますか?」、49年7月である。唐突のこのお願いに対し折り返し次の回答をいただき感激した。

前略標本並びに写真到着しました。これを拝見するとどうもクゲヌマランの再検討が必要となりそうです。—原色日本のラン p.164—でもふれましたように北海道で一時、問題となったものですが、今回ご送付のものに唇弁の先に黄色斑があるとあり、これで染色体を除いてクゲヌマランと一致します。するとエゾノハクサンラン(武田久吉1910)、エゾハクサンラン(小泉源一1929)、エゾ

ギンラン(中井猛之進1926)などの和名があり一方では *Cephalanthera elegans* Schlehter (1919) があって、結局この学名とエゾノハクサンランとを併せ用いるのがよいと思います。北海道の各地と青森、それに隣島、岩手、千葉及び相模の海岸が産地です。早くクロモゾームの数を知りたいものです。とりいそぎご返事まで」。

染色体の件はどうなったか知らない。

実は「日本の野生植物 I、p.207、(1982)」に、ギンランにはエゾギンラン、クゲヌマラン及びユウシュンランの種内変異3種がありユウシュンランは北海道から九州、クゲヌマランは本州と四国、エゾギンランは本州中部以北及び北海道、そしてギンランは本州から九州に分布するとある。これは前川先生の見解と大きな開きがあるように感じたのでここに敢て駄文にまとめてみた。

さて話は後半に移る。1978年(昭53.3)、前川先生から思いもよらぬ有珠山調査の件で手紙がきた。「すっかりご無沙汰いたしましたがお元気で何よりです。“有珠山の植物” どうもありがとうございます。いろいろと詳しい調査もさることながら、爆発の影響をものべておられるのはまことにありがたいことでした。その被害などがよくわかります。それに私は今度、有珠山爆発が或いはその自生の植物に何等かの種形成的な変化を与えていやしないかと思い、それを調べたく文部省の科研費に申請したのですが、幸いにして通ったならばひとつご援助をぜひお願いしたいと思っています。何しろ富士、箱根で数多くの種形成を見ているのですが、具体的に爆発をみてそのあとに変化が生ずるかも知れないのは、今回がはじめてなので、大変興味と期待とをもっているのです。3月終りから4月にかけて一寸台湾へカンアオイ類の調査に行き、帰りましてから貴地に参上したいと念願しています。どうぞよろしく。とり急ぎおん礼旁々ご依頼まで」。

実は私は、有志を誘って洞爺植物調査グループ(10名)をつくり期間2ヶ年、4月から10月まで毎日1回とし、51年春から活動が入っていたところ、たまたま翌年(1977)8月7日、有珠山が突然爆発、一瞬にして死の山となってしまった。そこで調査途中のまま締めくくったものが上記の小

著である

室蘭管林署並びに伊達警察署に登山申請の手続きをすませ、先生の一行（4名）を迎えたのは7月12日だった。滞在日数4～5日、その年は10月まで毎月1回、さらに54年度は3月5月7月に調査された。これに対し私が案内役としてお伴したのは洞爺湖畔の一周、湖内の中島、五十三山からのコース、それに木の集団地からの登山の3日間である。

このように短時日にすぎないが、この間私は先生の素顔に親しく接することができた。コーヒーハウスでウエイトレスが、ボーイフレンドなのか、長ながと立話をしているとき、「なぜああいうことをするのかね、こちらが先でないのか」とつぶやかれる。湖畔で赤いコブシの実に出合ったとき、それが欲しいといわれるので、私は近くにあった丸太をとり無雑作になぐりつけ枝ごと採ったところ、「ひどい方法だね」とつぶやかれる。ホテルの温泉風呂では、上りぎわにご自分で使われた桶と台はもちろんあたりに散在しているものまで無言で片づけられた。夕食の席で奥さんの話がでたとき、「シー内緒だよ、実は中井先生の娘」××と小声でいわれた。恩師に対する深い畏敬の念を伺うことができる。奥さんは中井猛之進の長女、昭11年の結婚、奇しくも先生がクゲヌマランを発表された年である。奥さんは昭和48年7月（1973）、そして前川文夫先生は59年1月（1984）この世を去られた。



## ユキザサ他

### 今その場所になくなった草花

加藤綾子

雪笹や遠き想いでいまあらた（綾子）

之は伊藤教授との出会いの一駒で私の作です。今なら未だ間に合いますから履歴書を出して下さいとの事務局からの御返答を頂きました。それが教授会にかかり伊藤教授の教室に廻されたとの事でした。

最初の年はストさわぎの激しい最中で玄関には机や椅子でバリケードが築かれ中に入れる状態ではありませんでした。やっと授業開始、今日は何階の教室か黒板を見て3階に、其日々々で変更になります。当生学生気質と申しましょうか、前の授業の黒板の字を今入って来られた先生が消されるのを見てがっくりしました。何故、習う学生が消して待つと言う事をしないのでせうか。

講義の中の植物の新種発見者の中でいかに医学者が多く名をつらねているのかも知りました。正門に入り農学部の方の時計を見て遅刻しないよう胸はずませて小走りに急いだのも今は昔となりました。

「この植物の名は何と云うのでせう」とお尋ねしますと「花が咲くとわかるのですが」と仰言られ、大きな顕微鏡を持って来られ、先程の針でついたような緑の小粒の一片を見せて下さいました。そこには真黄色に輝く色素が一面に拡がってゐます。自然の神秘に感動し暫くは其の素晴らしい美しさから遠ざかることは出来ませんでした。植物の名はスギバアカシヤでした。

次に之程直に私達の身体に必要な自然のしくみと言う事を体験によって会得した事も初めてです。それは白老の湿原地帯に行った時の事です。この日も伊藤会長は公務のため不参加、原先生が代り諸先生方と行かれ植物の名称其の他いろいろ御説明下され、場所は海が干いて出来た植物林でした。前夜来の豪雨が去ったとは言へまだ小雨の降る中、時折止むことはありますが、一日中雨の中、途中晴れたら樽前山に登りウロッパソウに出会う手はずも残念乍大粒の雨となり思いをのこして帰札致しました。